

遊園地における虚構性の研究

観光社会学からみた

奈良ドリームランドの「本物」「ニセモノ」論

小川 功

Isao Ogawa

跡見学園女子大学 / 教授

滋賀大学 / 名誉教授

I はじめに

平成26年9月「本物」「ニセモノ」の境界を追って大和路を巡っていた筆者は東大寺二月堂からの奈良市街の麓の中に異様な「ドリームホルン」なる「山岳模型」と木製コースター「ASUKA」の遺構を望見した。日頃、浦安市民として新浦安市街地から同様の「山岳模型」プロメテウス火山の噴火を見慣れている筆者でさえも、万葉の故地・黒髪山に残る「氷金時」と呼ばれていた一種異様な遊園地の残滓と古都の景観との不釣り合いな組み合わせに驚くほかなかった。この悪評芬々たる景観問題の根源である奈良ドリームランド跡地のある黒髪山に直行し、すぐ脇を走る公道から遊園地の入り口でもあった外周鉄道の駅舎を観察した。筆者自身も観光客としてほぼ半世紀以前に初めて訪れて見た開業当時の姿と変わらぬケバケバしい原色の色合いに、なぜか無性に「本物」の“ディズニーランドらしさ”とでも表現すべき特殊な感情を抱いた。

今、筆者の前に眠る奈良の“産業遺産”は、「偽ディズニー」などと酷評され続けてきた大規模遊園地の外側を一周していた外周鉄道の草蒸す元「ドリームステーション」駅舎である。いわば元々価値のない「ニセモノ」の、しかも長年放置され風

1) 拙稿「観光における虚構性の研究—観光社会学の視点で捉えた『旅の疑似体験』—」『彦根論叢』第403号、平成27年3月。なお、本稿での様々なディズニーの表記にはママを付し引用した原文通りとした。

雨に晒され続けて来た無残な廃墟にもかかわらず、米国の「本物」をそっくり移植した東京ディズニーランドの入り口よりも一段と「本物」らしい独特の雰囲気を感じ取ったのは「真正性」を判別できぬ浅学非才故の筆者の目の錯覚でもあろうか。

筆者は前稿「観光における虚構性の研究」¹⁾での序論に引き続き、温泉、鉄道、遊園等での各論に及びたい旨の予告をしたが、今回はまず遊園地における「本物」「ニセモノ」問題から開始することとしたい。以下の議論に登場する頭文字では同じくD、Lとなる4カ所の遊園地間の真正性や、模倣性の有無如何を具体的に検討したい。本稿に類出する各遊園地の名称は区分上、所在地名の頭文字であるA(米国カリフォルニア州アナハイム／1955年7月17日開業)、N(奈良市法蓮町／昭和36(1961)年7月1日開業)、Y(横浜市戸塚区俣野町／昭和39(1964)年8月1日開業)、T(東京／浦安市舞浜／昭和58(1983)年4月15日開業)で表記するほか、その他の類出資料も注記²⁾の略称を使用した。

さて、観光社会学で論じられてきた「真正性」という概念から考察して、これらA、N、Y、Tの4遊園地に関する一連の起源・創造・模倣・許諾等の行為のうちのどれとどれを「真正性」あるものと判断すべきなのであろうか。一般に真正性あるもの

と解されているAとTは世間周知の既存最有力テーマパークであるのに対して、然らざるNとYは業績不振等で既に閉園(Y平成14(2002)年2月17日、N平成18(2006)年8月31日)を余儀なくされた過去の遊園地であるため、虚構性を追及する本稿の分析の中心はおのづからNとY(とりわけN)となる。既に勝負がついているとはいえ、遊園地間の真正性如何という問題は、当然に知的財産権を巡る当事者間の微妙な対立関係を避けて通れないため、可能な限り当事者の公式資料、当時の発言記録等に依拠すべく心掛けたが、現時点での入手資料の限界からやむなく二次的資料に依存せざるを得ない部分が多く残された。

II 奈良と横浜の各ディズニーランドの概要

「ディズニーランドの日本版奈良市黒髪山に出現か」(S35.4.20大和③)とか、「ディズニーランドの構想と施設がそっくりそのまま奈良の地につくられる“ディズニーランドの日本版”」(S36.1.1読奈良)などのNの初期報道が、AとNとの間の誤解を生んでいたことが判明する。まずNを経営する株式会社ディズニーランドの情報が親会社筋に当たる雅叙園観光『有価証券報告書』に最初に登場するの

2) 遊園地名称のほか、本稿では類出する基本的文献について以下の略称を使用した。

[ディズニーランド関係] 挨拶…昭和35年8月株主候補者宛発起人代表松尾国三「御挨拶」[発起人の言葉<順不同>]ディズニーランド.jp「昭和35年奈良ディズニーランド 案内パンフレット」(<http://xn--gdka2erb0d2c.jp/23010401.html>)「奈良ディズニーランドの経緯」所収) / 大仏…「奈良の大仏を驚かした松尾国三」『週刊コロン』昭和35年9月13日 / 現代…「うちの会社・フレッシュ・ポイント」昭和38年10月『週刊現代』, p91 / 雅36/2…『雅叙園観光 有価証券報告書』昭和36/2期 / ド38/7…『日本ディズニーランド 有価証券報告書』昭和38/7期 / 銅像…ディズニーランド.jp「松尾社長夫妻寿像」(<http://xn--gdka2erb0d2c.jp/douzou.html>) 収録の「松尾社長の肉声」(日経記者とのインタビューに答えるラジオ番組) / 人生…松尾国三『けたはずれ人生』昭和51年 / 総覧…『レジャーランド&レクパーク総覧90～91』総合ユニコム、平成2年 / アルバム…「開園当時の思い出アルバム」

『奈良の夢の国NARAディズニーランド 45年間の思い出コーナー』平成18年8月閉園記念展示 / 希代…内山智彦「奈良ディズニーランドきょう閉園 希代の興行師 夢45年で暮」平成18年8月29日「産経新聞(大阪本社)」夕刊⑥ / 夢の跡…「ディズニーランド30周年でこっちは夢の跡になった『奈良ディズニーランド』」『週刊新潮』平成25年8月29日号, p59～61

[ディズニー関係] 伝説…ボブ・トーマス『ディズニー伝説 天才と賢兄の企業創造物語』山岡洋一・田中志ほり訳、日経BP社、平成10年 / WD…ボブ・トーマス『ウォルト・ディズニー 創造と冒険の生涯』玉置悦子・能登路雅子訳、講談社、平成22年 / D…マーティ・スクラー著、矢野野薫訳『ディズニー 夢の王国をつくる』河出書房新社、平成26年

[新聞雑誌] 夕刊のみ夕、紙面は○数字で表示。大和…『大和タイムス』 / 読売…『読売新聞』東京本社 / 大阪読売…『読売新聞』大阪本社 / 読奈良…『読売新聞』奈良版 / 朝日…『朝日新聞』東京本社

は昭和36/2期であり、関係会社受取手形の項に「(株)ドリームランドは昭和35年9月22日創立、米国ディズニーランドと同規模の遊園地を企画して居り昭和36年7月開店の予定である。尚当雅叙園観光(株)とは関係会社である」(雅36/2)と注記されている。同社は35年8月10日設立に伴う株式申し込みを開始し8月20日締切ったが、その間の14日には「新会社設立に伴う新株式の公募について」の新聞広告を出した。そこで発起人代表の松尾国三³⁾は「先般私共発起人一同が世界的に有名な遊園地であります米国ディズニーランドに範をとり、日本的施設を加味したディズニーランドの日本版とも云うべき我国に類のない大規模な遊園地を奈良黒髪山(関東にも同規模なものを明年着工の予定)に建設を計画し、奈良に於ては約十万坪の敷地の整地工事も着々進捗中ではありますが、これが経営会社として『株式会社ドリームランド』の設立を目論んでおります」(S35.8.14読売⑩)との声明を出した。したがって初期報道に使用されたAの「日本版」という表現自体の発信源が松尾サイドであったことを推測させる。同時期に松尾が出した株式勧誘目的の「御挨拶」でも「米国ロスアンゼルスに郊外にあります世界的に有名な遊園地『ディズニーランド』と広さも施設の規模も殆んど同様ではありますが、『ドリームランド』にはこれに日本的な施設を加味して、娯楽と科学教育を兼ね具えた独特の雰囲気をもり上げるもの」(挨拶)と同趣旨が謳われている。

昭和38年7月期の日本ドリーム観光(千土地興行がドリームランドを吸収合併し改称)の有価証券報告書でも「奈良ドリームランドはアメリカのディズニーランドに範をとった大規模な総合的遊園地」(ド38/7, p12)であると記載している。35年

5月21日地鎮祭後の記者会見で公表された計画によれば、「未来の国、過去の国、未開の土地、オトギの国の四郡にわかれたディズニーランド」(S35.5.28朝日⑩)のゾーニングに範をとった「ドリーム・ランドはこのほかとくに『日本の過去・江戸の町』を加えた五ブロック。…江戸時代の日本の町は、むかしのカゴに乗って見物するといった具合」(S35.5.28朝日⑩)となっていた。Nの開設前後の松尾の話では「『ディズニーランドのマネばかりではケタクソ悪い』というので、それを上回るスケールにし、日本の特色も加味しようという考え」(大仏, p12)から、「回想の国(日本) …のアイデアは日本独特のもので、“ディズニーランド”にはない。だから、特に力をそいでいる」(大仏, p11)と松尾の強い意志が語られている。

松尾の部下でNの実質的な観光デザイナーである阪上勉⁴⁾も対談で次のように語っている。「当社の松尾社長という人の夢ですね。具体的に考え出したのは今から五年前ですが、その出発点となったのは松尾社長が、ブラッセルで博覧会があった帰りに方々回りました。勿論ディズニーランドもみたわけです。そういうものを見て感じたことは、日本にもこういうものがなければいけないということでした。…奈良ではアメリカのディズニーランドをそのまま真似しようとしたんですが、色などの点で、日本にはアメリカンスタイルは少し飛躍しすぎるようです」⁵⁾

昭和35年8月30日の「拓けゆく奈良生駒」という広告には「『ドリームランド』は米国ロスアンゼルス郊外にある『ディズニーランド』から計画の概要を学び…①過去の国、②日本の過去、③未開の土地、④未来の国、⑤オトギの国の五つに分けられて」(S35.8.30読奈良)との、Aから「計画の概要

3) 松尾国三の資質は上記の自叙伝、三鬼陽之助との対談(「ドリームランドへかける夢」『財界』昭和36年11月15日)や、常見耕平「松尾国三の『けたはずれ人生』」(社団法人現代風俗研究会編『現代風俗2001 物語の風俗』第23号、平成13年)等の先行研究を参照。

4) 日本ドリーム観光の阪上勉常務は昭和19年浜松高等工業卒業、大阪機工、新明和工業勤務を経て、34年1月「遊園地デパート遊戯機械の設計、製作を自営」(ド38/7, p1)、35年3月株式会社ドリームランド設立準備委員となり、昭和35年9月同社設立とともに取締役就任。

を学」んだ当初のNのゾーニング案として「園内はメインストリート、冒険の国、幻想の国、未来の国、過去の国の雰囲気の異つた五つの部分から構成」(ド38/7, p12) されていた。松尾自身も放送番組でも「芸術院会員の村野藤吾先生と一緒にしてもらい、設計してもらった」(銅像)と語っている。Nの設計は村野藤吾が主宰する村野・森建築設計事務所が行ない、施設全般の施工は清水建設(S36.6.23大阪読売夕刊②)であった。(総覧, p668)

次に昭和36年7月8日Yの計画を報じた『朝日新聞』は「ディズニーランドのような…大規模な遊園地“ドリームランド”を建設する計画」とし、「松尾氏は同じ構想のドリームランドを奈良市につくり、この一日開園した」(S36.7.8朝日⑭)とした。また開園後の昭和40年11月13日の『朝日新聞』も「アメリカのディズニーランドを手本に去<39>年八月開園した」(S40.11.13朝日⑤)と報じた。このように、YをNと同様にAの模倣とする報道も少なくないが、実はこの時期当事者は異なる発信を行なっている。まず昭和39年8月2日開業したYに関して、経営主体の日本ドリーム観光自身の有価証券報告書は次のように記載している。

①「奈良ドリームランドがディズニーランドに範をとっているのとは趣きを異にしたヨーロッパ的雰囲気の大規模な遊園地」(ド39/7, p13)、②「世界中の有名な遊園地の諸施設及び奈良ドリームランド諸施設の基礎資料に基づき更に研究改善した」(ド39/7, p16)、③「世界に未だ類を見ない近代遊園地」(ド39/7, p16)、キャッチフレーズ「横浜に世界最大の国際観光都市誕生」(現代, p91)、④「メインストリート、冒険の国、子供の国、過去の国及びスポーツランドの五つの国を造成」(ド39/7, p16)

5)6 『実業往来』昭和39年11月, p79~80。松尾自身は「ベルギーのブリュッセルでは万国博覧会を開催中である。私は『万博』の見物と劇場、映画館視察も兼ねて…急遽ヨーロッパに飛んだ」(人生, p305)と述べているが、ブラッセル博覧会は昭和33年4~9月開催の戦後初の大型国際博。

Ⅲ 奈良ドリームランドとディズニー社

Nという存在に対してA側がどういう対応をしたかについて、関係者の見解は全く異なっており、しかも確たる資料を欠くこともあって、残念ながら真相は闇の中である。一般的にはNが質の低い施設を勝手に作ったことが、ディズニー社に強い日本人不信の念を抱かせたとの理解が支配的である。それはオリエンタルランド関係者が折にふれて、その趣旨の発言を続けているからでもある。これに対して阪上は「ディズニーもそうなんですよ…チボリーという百八十年つづいている遊園地があるのですが、ディズニーランドはここ<チボリー>とよく似ています」⁶⁾とチボリーとの類似に言及している。

地元誌の『大和タイムス』を例にNの当初計画段階の記事を追いかけると、①昭和35年の新春対談で奥田奈良県知事(Nの用地をあっせん)は「世界的規模の施設誘致も計画」(S35.1.1大和②)している旨を仄めかし、②昭和35年3月24日の敷地売買調印式を機に「ディズニーランドの日本版奈良市黒髪山に出現か」(S35.4.20大和③)との推測が報じられ、③地鎮祭を前に昭和35年5月16日高松奈良市長の記者会見で「黒髪山の“夢の遊園地”」(S35.5.17大和①)の概要が公表された。市長が松尾側から得た情報によればAとの接触の状況は次のとおりである。「松尾氏はすでに三回渡米し、米国ロサンゼルス郊外にある有名なディズニー・ランドを視察、昨年秋にはディズニー側の技術援助を得ることを確約しているほか、ことし三月には建築設計家の村野藤吾氏、遊園地施設設計者の坂上勉氏とともに技術面における細部の視察もすませており…」(S35.5.17大和①)

さらに④昭和35年5月21日の地鎮祭の際の松尾自身の記者会見でも「この施設はディズニー側の技術援助を得ることになっており、建設は日本でははじめて…来秋には関東の千葉県下に建設が予定されている」(S35.5.22大和①)と、同系の千葉観光による手賀沼ドリームランド構想⁷⁾を意識した発言とともに、Aからの技術援助を明言している。地元市長・松尾自身による「ディズニー側の技術援助」という耳障りの良い言葉が繰り返し地元紙等に掲載されたという事実そのものはディズニー側の真意如何は別としても、結果的には甘い期待が地元・関係者に長く浸透していく経緯となったものと考えられる。またNの閉園時、高校卒業後の昭和56年ころ入社した計算になる「同園に25年間勤めてきた浦崎光一・営業部副部長(43)」（希代）の伝聞によれば「ディズニー側と契約して『ディズニーランド』を名乗る予定だったが、最後の契約書をかわす段階で折り合いがつかず、話が流れた」（希代）とのN側の社内の伝承も存在する。この特集記事を書いた産経の内山智彦記者は松尾の長女である松尾昌出子松尾芸能振興財団理事長にも取材して「奈良に建設するときも、技術者を派遣してくれたと聞いています。パテント料も一切なし。好意に父は感激していた」（希代）との伝聞を閉園時の署名記事に記載している。産経大

阪社がNの閉園特集の中で特に署名記事としているものであり、単なる「与太記事」とは決め付けにくい。また同時期発行の『週刊新潮』でも前述の松尾理事長は「技術者まで連れて訪ねてきた父の熱意にディズニーさんも心を打たれたのだと思います。父は“協力を得られた!”と、それはえらい喜びようでした。…父とウォルト・ディズニーさんとの間での話だったので、契約書やお金のやり取りはなかった」（夢の跡, p60～61）と同趣旨の発言をしている。同園「生え抜き」古参社員等の伝聞はNの存在に着目する米国人らのブログ⁸⁾とも大筋で一致する。

筆者にはこれらの伝聞・風説の類の真偽を判別する能力がないが、一切のメモを残すことなかった松尾の口述筆記によると考えられる自叙伝にはウォルトとの対面の場面が生き生きと描かれており、松尾がディズニーランドに一目惚れし、天才・ウォルトの人柄にも惚れ込んだ様子もうかがえる。また、なかば神格化されているウォルトにも後述の通り初対面の大映の永田ラッパを信用して日本での配給権、商標許諾権等を一任してしまうような意外な一面もあった。ウォルトと松尾という二人の異色の経営者には正規の教育を受けることなく叩き上げで成功をおさめた苦勞人という共通点⁹⁾もあった。上記のような状況証拠を積み上げてい

7) 手賀沼の開発計画は田口了麻・高田正哉「手賀沼ディズニーランド開発計画はなぜ失敗したのか 戦後とポスト戦後の狭間で」『日本観光研究学会全国大会学術論集28』平成25年, p177～180、『我孫子市史 近現代篇』我孫子市教育委員会、平成16年, p629 以下、佐藤清孝「幻の『手賀沼ディズニーランド』」(2012年6月24日朝日)ほか。

8) Nの現況写真を多数アップしている外国人の運営するサイトはNの歴史を「1961年日本ドリーム観光が建設したパークは、カリフォルニアのディズニーランドを訪れた松尾国三のアイデアであり、ドリームランドの構想はそれに基づいている。建設の過程では日本のデベロッパーはディズニーランド側と協力した。最終段階において双方の会社間になんらかのよくない問題が発生し、ドリームランドはそのスタイルを根本からやり直すこと、すなわち、米国側によってディズニーの商標を使用することが禁止されたため、同園独自のキャラクターたち

を作る必要が生じた」(00110010: Nara Dreamland-Blogger 2wid.blogspot.com/2013/09/nara-dreamland.html)と要約する。また別のサイトでも「松尾はディズニーランドの日本版を作るためウォルトと直接に接触し…ディズニーのエンジニア達とも直接接触したが…有名なキャラクターのライセンス料で合意できなかったので、日本側は独自のマスクットを作り、奈良ディズニーランドの考えを放棄した」(Nara Dreamland Frequently Asked Questions abandonedkansai.com)とある。派遣された技術者の名前は記されていないが、日本語版製作のため度々来日している日本通のジャック・カッティング技術部長あたりの可能性もあろう。

9) 「ハイスクール初年までしか学校で学ばなかったにしては、ウォルトは見事な独学ぶりを発揮」(オーリー・ジョンストン談、エイミー・ブース・グリーン&ハワード・E・グリーン著、阿部

くと、筆者の想像の域を出ないが、若い頃は「実川延十郎」を名乗る関西歌舞伎役者でもあった松尾の演技力¹⁰⁾(英語力ではない)に、千両役者のウォルトも(周辺の心配をよそに)つつい過剰なりップサービスを口外してしまった可能性も残されているのではなからうか。

双方の不一致を埋めるに足りる情報を持ち合わせていない筆者に残された方策として昭和35年8月新会社設立に同意した発起人を分析することとしたい。「財界、電鉄、興行界の代表十八人」(S35.5.28朝日⑩)に地元の知事、市長を加えた20名の発起人の多くは日映の発起人など松尾人脈に繋がる人々であるのはもちろん、Aないし遊園地ビジネスに多大の関心を有する財界人らであった。資料上で明らかなのは「私も米国へ行く度に、必ずディズニーランドを訪れる」(挨拶)ほどの本格的リピーターの永田雅一を筆頭に、開園2年後の昭和32年に弘世現¹¹⁾、開園3年後の昭和33年に松尾国三、昭和34年佐伯勇の指示を受けた部下¹²⁾、昭和35年森永太一、高椋三次¹³⁾、岡崎真一らがすでに現地を訪問していた。

最大のキーパーソンである永田雅一自身の回顧によればディズニーとの配給権の交渉経過は以下の通り。昭和25年8～9月の訪米時「ディズニーとサミュエル・ゴールドウィンに会うと…『どうだ、

日本におれの映画を入れたらどうか…』と云うので約束した。こうして…僕はアメリカでサミュエル・ゴールドウィンとウォルト・ディズニーのエージェントを引受け…大映に洋画部を作り、ディズニーの長篇漫画を輸入配給した」¹⁴⁾

昭和26年刊行の『大映十年史』にはウォルトが大映の創立十年を祝賀し「今後とも貴社と契約下にある当社の長篇及び短篇映画が引続き成功裡に配給されることを期待」¹⁵⁾する内容の署名入りの英文書簡が転載されている。こうして新設された当時の大映洋画部の宣伝にも携わっていた人物も「ディズニー映画は、戦後、大映を通じて日本へ輸入されていました。永田雅一社長とウォルト・ディズニー氏の親交から発して、ディズニーの長編アニメ・劇映画・長編記録映画などは、大映洋画部が配給していた」¹⁶⁾と永田とウォルトとの親交を証言している。このように永田はディズニー社の本業である映画業界での輸入代理店たる関係から朝日新聞が昭和33年4月三越本店屋上にAのパノラマ模型を展示する「こどもの夢の国 楽しいディズニーランド」(S33.4.30朝日⑧)展にも協賛している。またバンビ等の「名称と図案は米国のディズニーが登録を持っており、日本で大映株式会社がこの権利を預っていた」¹⁷⁾が、久美薫氏が開示する池田製菓株式会社の社史にも「初代社長

清美訳『ウォルト・ディズニーの思い出』竹書房、平成25年、p298)したとされ、永田雅一自身のW. ディズニーへの追悼によればウォルトは永田に「私たち兄弟は以前漫才師だった…もし漫才師として成功していたら、今日のわれわれはなかった」(『キネマ旬報』昭和42年1月、p79)と語ったと追想している。

10) 作家の今東光は「みみずく問答」で松尾の苦勞話を聞き、「松尾さんほどの苦勞を経た人は一寸稀だと思ふ…これほど美しい話に僕は近来になく打たれた」(昭和34年3月『財界』、p68)との最大級の賛辞をおくっている。

11) ボーイスクウト運動など青少年問題に関心の高い弘世現は松尾より先にディズニーランドを訪れたほどの熱心なディズニー派で、「その成果の要因は、ディズニーの真剣さ、ごまかしのない創造性のある企画にある」(挨拶)と分析し、後に

本命となるオリエンタルランド計画でも最初の理解者の一人ともなった。

12) 「社員を米国…に派遣して、その施設を研究」(挨拶)

13) 「数年前アメリカに行ったとき、ディズニーランドを見て『こんな施設が奈良にあれば』と思っていた」(S36.1.1読奈良)

14) 永田雅一「映画自我経 連載第9回」『キネマ旬報』昭和31年12月上旬号、p83

15) 『大映十年史』大映株式会社、昭和26年(頁付なし)

16) 映画「塔の上のラプンチェル」-映画が中心のブログです! blog.goo.ne.jp/ken401_001/c/69006189e9f988851af3ab0e843fae5a 2011/03/17. 永田とウォルトとの親交に関しては田中純一郎「永田雅一」昭和37年、p120

17) 『小樽市史』第5巻、昭和42年、p301

の池田泰夫氏は、かねてから知り合いの映画会社・大映社長、永田雅一氏に『ディズニーキャラクターを使用できないか』と相談を持ちかけた…当時、ディズニー日本の代表者であった永田社長は、ウォルトディズニープロダクションとの契約に基づき『バンビ』の図形意匠についての日本国内に於ける使用権、並びに第三者にその使用を許可する権利をもっており、池田康夫氏の願いを即座に受け入れ、あつという間に『バンビ』の使用が認められ契約を結び…¹⁸⁾とある。ディズニー本社でも1947(昭和22)年「バンビ」等の商品化ビジネスのためのパリ事務所を設立(伝説, p270)する一方、「ディズニーのキャラクターを守る」(伝説, p311)ための法務活動を展開したが、「外国での海賊行為の追及は難しく、特に南米では手を焼いた」(伝説, p312)という。日本代表たる永田は「図形意匠についての日本国内に於ける使用権、並びに第三者にその使用を許可する権利」を有して本国に稟申せず即決できたとも解され、朝日新聞がAのパノラマ模型を、池田製菓が「バンビ」を許可されたと同様なことが少し規模を大きくしてNに関しても発生した法的可能性を示唆している。なお昭和32年「大映洋画部長箕浦甚吾退社して日映へ走る」¹⁹⁾など、ディズニー映画に関わった大映人も松尾らの発起した日映に加わるなど、松尾と永田との関係は微妙であった。しかし京王という金主を喪失した日映構想は昭和32年4月竜頭蛇尾に終わり、昭和32年千土地興行が20%出資して設立した映画製作プロダクションの日映は昭和33年1月末をもって、渉外営業の箕浦甚吾を含む全員を解職、製作を中止して休眠会社となった²⁰⁾。なおその後昭和40年日映と千葉観光(手賀沼の公有水面埋

立)が合併し、雅叙園観光も36%出資する昭和不動産が発足して日映の名は消えた。

昭和35年8月永田雅一自身の発言によれば松尾の「友人」であり、「松尾君とディズニー氏との仲介の労をとった紹介者」(挨拶)であると前置きした上で、「このドリームランドは…ディズニーランドを踏襲するものであるが…今般ウォルト・ディズニー氏了解の下に、日本に於てもその実現をみる運びとなったのは洵に御同慶の至り」(挨拶)として、ディズニー日本の代表者たる永田自身がウォルト本人に松尾を友人として紹介し、米側と交渉の末に「ウォルト・ディズニー氏了解」の存在まで明言している。松尾が日映騒動の際の敵方であったはずの永田とも日映休眠化の過程で関係を修復し、恩讐を超越して米国側へのパイプとして活用した巧みな交際術が窺える。

以下はN・A間の直接的な資料を未発掘な現状にあって、唯一当時の米国側の対応が垣間見える読売ランド構想段階でのA関係者の発言をもとに、NとAの行き違いの発生理由を類推することとしたい。まず、天下の大新聞・読売が一身同体の日本テレビとともに正力社主直々に何度も応接して、新聞紙面でも繰り返し好意的に報道して、読売ランドでの提携を期待する読売側の熱意と本気度を相手側に何度となく伝達したにもかかわらず、結局先方から実のある言質は引き出せなかったように解される。米国側から見て提携相手としての実力の点で読売・正力とN・松尾を客観的に比較すれば、その優劣は自ずから明らかであろう。ウォルト自身がA開園にあたり、米国大手テレビ局ABCの資金的支援を受けるなど、テレビ局の影響力を熟知していた。その証拠に米国側が正力社主を訪ねる先は新聞社でなく、常に日本テレビ

18)『池田製菓株式会社 社史』(久美薫の世界 kumikaoru.otaden.jp/e248491.html)。池田製菓会社の宣伝映画「おいしいキャラメルのできるまで」、「バンビ誕生」などが存在した。

19)『映画年鑑 1958年版』時事通信社、昭和33年、p13

20) 田中純一郎『日本映画発達史 IV』中央公論社、昭和51年、p224

本社であった。有力テレビ局を擁する読売側の熱心な働きかけでさえも期待したようには奏功しなかったことから類推して、一介の興行師・松尾の一二度の面会だけで勝ち目があったとは到底考え難い。

つぎに米国側の読売側への返答は「ディズニー・プロには世界各国から＜遊園地建設への＞協力を求めてくるが、これまではみんなことわってきた」(S38.6.29読売①)という従来からの一貫した大方針を明確に伝えたことである。Aの成功後「テーマパーク…をほかにも国内に作らないか、という申し出がいくつか出された」(WD, p318)が、ウォルト自身も1959(昭和34)年以前には「ディズニーランドを二つ作るつもりは全くないと何度も発言」(伝説, p317)していた。しかしこの時期は主に米国内の話で「世界中から誘致の声がかかって」(D, p230)くるのは1971(昭和46)年開業のディズニーワールドの大成功からであって、マービン・デービスによれば「ウォルトは世界中の人々から、いろいろな場所にディズニーランドを作ってほしいと頼まれ続けた。…それに対し、彼は断固として拒否してきた」²¹⁾という。ようやく1959年になって考えを変え「＜米国＞東部に第二のディズニーランドが作れるかどうか調査をはじめ」(伝説, p317)た。ウォルトは「＜西部の＞自分の作ったアトラクションが、もっと洗練されている東海岸の人たちに受け入れられるかどうか心配」(伝説, p319)だとしたほど国内での増設にさえ慎重であった。1960(昭和35)年ニューヨークの不動産会社から頭痛の種の「フリーダムランドの経営で提携したい…共同経営にあたって主導権を主張するつもりはありません」(伝説, p309)との救済の要請が来たが、疑問視した兄弟とも拒絶で一致した事例が知られてい

る。1961年に22年間にわたるバンクオブアメリカの借入金返済を終えたため、兄のロイもようやく第二のパーク案に賛成したという。こうした兄弟そろっての増設話への慎重な対応ぶりを考えると、この時期のウォルトが兄ロイにも諮らず、日本への進出にも等しい松尾からの誘致話にその場で安易に乗ったとは考えにくく、まして松尾側が主導権を握った形での日本進出は想定しにくいように思われる。

読売側への原則論確認とは別に、米国側の現実的対応として相手側の面子を立てて、しかるべき役職の首脳陣を何度も来日させ、その都度言質を取られない範囲内の最大限の“リップサービス”を繰り返し、どうやら読売側に「多少は脈がある」との淡い期待をその都度抱かせることには成功しているようである。もし全く脈がないと判断したら、こう何度も来社を記事にすることもなかったであろう。昭和33年当時松尾の懇願に対しても親交ある永田の顔を立て、相手側に明確に拒絶の意思を伝えることはしない婉曲的な表現による現実的対応があった可能性も残されていよう。

松尾より先に昭和32年に弘世現日本生命社長などがAを見学しているとはいえ、開業して2～3年のAを訪れる日本の財界人はまだ珍しく、しかもウォルトに面会まで申し込む物好きは珍しかったのであろう。親友の永田の紹介状を持ってきた遠来の松尾にウォルトが「おもてなし」の意味で相応のリップサービスをしなくても不思議ではあるまい。仮にウォルトが松尾からNへのアドバイスを求められたと仮定すると、恐らくその返事は「大衆にサービスするこの種の設備はその国独自のスタイルが一番適当だ」(S38.3.20読売①)として、和風「竜宮説に賛意をのべ」(S38.3.20読売①)たジャック

21) マービン・デービス談、前掲『ウォルト・ディズニーの思い出』, p291

カッティング技術部長の「読売ランド」構想への回答内容と五十歩百歩ではなかったであろうか。偶然かもしれないが、Nの当初案「お伽の国」には「他の施設のまねをするのではなく、はるかにぞん新で雄大なもの」²²⁾を目指した「読売ランド」と同様な「竜宮城」が存在した。

松尾自身も「ディズニーランドのマネばかりではケタクソが悪い」(大仏, p10) という発言をしており、建前として「日本人が日本に独自の遊園地を作る」というポーズも取っていた。益田啓一郎氏によれば「1961(昭和36)年の開園時のウォルト・ディズニー、ディズニーランドのエピソードに興味を持ち調べたら、当時の読売新聞などに読売や日テレも絡んで支援する記事も見つけました。結局ディズニーとモメて中途半端な施設のまま開園」²³⁾したとある。読売新聞はNの開園に際して「本社機も祝賀飛行を行ない開場を祝」(S36.7.2大阪読売⑦)い、「本社機から開場を祝って投下された務台光雄大阪読売新聞社代表のメッセージが、海野秀雄本社編集局次長から松尾国三ドリームランド社長に手渡され」(S36.7.2読奈良) たほか、「開場を飾った音楽会」として大阪読売新聞社主催「小、中、高校生の楽しい音楽会」(S36.7.2読奈良) をNで開くなど、N開園に協賛する姿勢を見せている。筆者は現時点でこれ以外の「支援」の具体的内容を明確にはできないが、当時世界一のレジャーランドづくりに熱意をみせていた正力社主や、ディズニー関連テーマへの読売側の熱の入れ方から見て、何らかのさらなる支援姿勢があったとしても不自然さは感じない。

ここで川崎千春が米国を表敬訪問して米国側のただならぬ心証を察知した昭和37年1月以降のY側の発言をみてみよう。日本ドリーム観光松尾

栄之(松尾社長の女婿) 専務は「ここ<Y>はディズニーランドよりも、勿論、先輩格の奈良のものよりも大きく、しかも、少しも模倣しておりません。いくなれば我が社の一というより、日本の独創味溢れた遊戯施設の結晶」(現代, p91) だと胸を張った。また阪上も対談で「奈良ではアメリカのディズニー・ランドをそのまま真似しようとしたのですが、色などの点で、日本にはアメリカンスタイルは少し飛躍しすぎるようです。こちら<Y>の方が我々にはじっくりくんじゃないかと思えます」²⁴⁾、「今までの日本の遊園地という観念を一切抜きにして、ヨーロッパ、特に北欧の遊園地に焦点を当てたわけです…そういう遊園地のあり方…をみて来て、そういう様式を大きくして、<Y>ドリームランドに採り入れているのです」²⁵⁾と米国流から北欧流への全面的宗旨替えの顛末を語っている。

「ディズニー・ランドをそのまま真似」との阪上の言のように、昭和36年以前のN構想ではAの模倣を明白にしていた。しかるにYでの「少しも模倣しておりません」という意味深の松尾専務の言は、この時期に日本ドリーム観光側に対して何らかの“外圧”が伝えられ、この結果当初想定していたはずのNの設計図面をY用にそっくりコピーするという安易な方法を断念、Yでの新たな観光デザインを模索すべく多忙な松尾が50日間も渡欧する羽目²⁶⁾になったものと想像される。

IV 東京ディズニーランド開業後の奈良ドリームランドの変容

N閉園時の記念パンフレットは「外輪船や帆船に乗って写真で見たり、本を読んで知っているフランスやドイツの古城、アイヌの村、江戸時代の城下

22) 『よみうりランド レジャーとともに40年』よみうりランド、平成元年, p108~111

23) 益田啓一郎「奈良ドリームランドの絵葉書」平成25年4月1日「博多湾つれづれ紀行」(blog.goo.ne.jp/mapfan01/e/919f47e7cdf44af683145660fd04f2c0)

24)25) 阪上勉対談「実業往来」昭和39年11月, p79~80

26) 松尾は「私は多忙の中を抜け出して、今一度世界各地の遊園地視察に旅立った。ヨーロッパから、アメリカへ…。約五十日の視察旅行であった。特に、私の頭に残ったのは、コペンハーゲン(デンマーク)のチボリの遊園地であった」(人

町や厳島神社など過去の情景が体験できました。※現在ではカプリプールになっています」(アルバム)と改修の事実を示している。昭和60年「TDLがオープンした現在、いつまでも“ディズニーの和製版”では通用しないという…理由から、同園では昨<昭和60>年より3カ年計画で園内の改造を進め…アメリカンムードでつくってきた園内をTDLに対抗すべくヨーロッパ風に変貌させ、個性化を図ろう」²⁷⁾としたことによる。昭和「五三年から相次ぐ大型機の導入で再整備」²⁸⁾の結果として開園時撮影の航空写真と「1985年カプリプール新設時撮影」(アルバム)の航空写真とを比較すると、開園20周年の昭和60年に「『過去の国』を全面的に改造、大規模なプールを新設」²⁹⁾すべく、正門入って左手の水路一体の緑地が取り壊され、昭和60年新設の「ウォーターパーク『カプリ』は5万㎡の敷地をもつ」(総覧, p668)「西日本最大で地中海ムードの漂うようウォーターパーク(アクアパルコ、カプリ)」(総覧, p475)にそっくり置き換わっている様子が写されている。

「今<昭和61>年初頭よりメインストリートの改造にも着手、それまでの18世紀後半のアメリカ西部の雰囲気をもった街並をヨーロッパ風に一新」³⁰⁾させた。改造の理由は「大型機が設置されている未来の国や幻想の国への客の流れが多く、冒険の国、過去の国への流れは少なくなった」³¹⁾との分析の結果であった。この結果、「ゾーン全体の名称も『過去の国』から『アクアパルコカプリ』と変えられ…『冒険の国』『未来の国』の名称も改造後にふさわしいものに変更」³²⁾され、Nの特色も「園内はヨーロッパ調に統一された落ち着いた雰囲気」(総覧, p475)に一変した。つまり、構想時にN(Aを模倣)を安易にコピーした米国式をイメージ

していたはずのYが、なんらかの外圧を受けて途中で西欧風に急遽設計変更したのと同様な変更を、Aを“勧請”したTの出現を機に、Nは「いつまでも“ディズニーの和製版”では通用しない」³³⁾と考えて開園20周年の昭和60年から「3カ年計画で園内の改造を進め」³⁴⁾ざるをえなくなったものかと想像される。

V 東京ディズニーランドの 欠落部分と奈良ドリームランドでの 補完

アメリカ最初のディズニーランドはウォルト一家が失望した東海岸のコニーアイランドを反面教師として、ウォルト自身が気に入って視察したコペンハーゲンのチボリ公園の詳細なメモを出発点として、また入り口のサンタフェ・ディズニーランド鉄道はウォルト自身が幼少期を過ごした実在のサンタフェ鉄道がモデルになっている。つまり、発想の起源はチボリ公園やサンタフェ鉄道であり、ウォルト自身の想像力によってディズニーランドという形に創造された作品である。ウォード・キンボールによれば「最初ウォルトは…スタジオ敷地内にハーフインチスケールの鉄道模型を置きたいと考えていたらしい」³⁵⁾といわれる。1953年Aの最初の完成予想図で「盛り土で周辺を取り囲み、中からは外の景色が見えないようにする。盛り土の上には小型の鉄道が走り、汽車に乗りながら園内のアトラクションを眺められる」(WD, p262)と描かれた外周鉄道の所有権についてウォルトは「ディズニーランドの周囲に蒸気機関車を走らせ、それを自分の所有にすること」(伝説, p322)を強く主張し、株主の反対を懸念するロイを困らせた。白熱した議

生, p327)と述べている。

27)29)30)32)33)34)『アミューズメント産業』昭和61年5月, p75~77

28) 31) 『レジャー産業資料』13巻10号, 昭和55年10月, p108~109

35) ウォード・キンボール談、前掲『ウォルト・ディズニーの思い出』, p240

論の末、「ウォルトの個人会社WEDが鉄道を所有し…ウォルトは自分の望むものを手に入れた。大好きな鉄道が自分の自由になった」(伝説, p322~3)という経緯からみても、熱烈な鉄道愛好者のウォルトが園内の単なる一遊戯物としてではなく、“結界”としての外周鉄道という形態に強いこだわりを有していたことが判明する。

こうした創設者自身の強い嗜好で実現したディズニールンドを正規の許可を得なかったとしても、松尾・阪上らの視察した際のメモを出発点として、ほぼそっくり模倣したものが現存するNの外周鉄道である。昭和35年8月20日の「新会社設立に伴う新株式の公募について」の新聞広告(S35.8.14読売⑩)の中で「ドリームランド」を取り囲む線路の上を煙を吐いて驀進する外周列車の図柄が描かれている。Nの象徴として外周列車を採用したことは松尾らがAにおける外周列車の重要性を十分に認識していたことを示す。ところが正規の許可を得たTの方は、なんらかの未解明な理由でウォルト自身の鉄道へのこだわりをあえて変更した別のデザインを採用した結果、Nの正面は「東京ディズニールンド以上にアメリカのディズニールンドに似ている³⁶⁾との見方まで生んだ。

Aにあって、Tにない外周鉄道と中央駅舎、メインストリートと馬車鉄道などの欠落部分がNには存在するという事実をどう考えるべきか。筆者の勝手な想像はAを模倣したNの外周鉄道と中央駅舎が運輸省から地方鉄道法違反の嫌疑をかけられ、危うく「本物」の鉄道に“昇格”させられそうになるほどの見事な“出来栄え”であり、利用者にもNを象徴するモノとして強く印象に残ったという事実が上記の欠落に何らかの因果関係を有しているのでは…という見立てである。よく知られている史

実として米国側はT候補地の一つとしての富士山麓を、多くの日本人にインプットされている富士信仰の対象物たる御神体を米国領たるべきパークから遮蔽し難いとの理由で忌避したとされる³⁷⁾。同様な忌避思想が連綿として継続しているものと仮定すれば、当時は現に存在していた“忌むべき施設”を連想させかねない部分を取って削ぎ落としたのではなかろうか。

前述の通りNはTの出現を機に米国式を西欧風に変改したが、人気のあった外周鉄道と中央駅舎は「ジャングル巡航船」などととも留保され、現在も廃墟として往時の姿をとどめている。また日本ドリーム観光の有価証券報告書の「横浜ドリームランド建設計画」の「構造及び規模」にも「お伽鉄道」とは別に「外周列車」(ド39/7, p16)が短期間ながら存在していた。米国側の強い意向を考慮した結果でもあろうか、米国式を断念し開園当初から西欧風で出発したはずのYにも、Nと同趣旨の外周列車を置いた松尾・阪上らは当該施設によほどのこだわりがあったようにも感じられる。Nの敷地の公売が報じられている昨今、遊園地の真正性・虚構性を考察しようとする筆者にとって、環境保護サイドから「ネガティブリスト」などと蔑視される中、今日まで半世紀以上にわたり幾度も改修に際して奇跡的に保存され続けてきた当該外周鉄道と中央駅舎³⁸⁾は、観光学とりわけ観光社会学等の研究素材・教材としての価値のある一種の「産業遺産」(テーマパークの歴史の上で未解明の数々の謎を秘めている点や、当然に人類の陥った過去の愚行を表象するマイナスの価値を持つ「負の遺産」の意味合いをも込めて)でもあろうかと思量する。

36) 奥野一生『新・日本のテーマパーク研究』竹林館、平成20年、p32

37) 桂英史『東京ディズニールンドの神話学』青弓社、平成11年、p9以下

38) Nの主要施設はDreamStationと呼ばれる駅に至るまですべてAのコピーだとするブロガーでさえ、「でも、入り口は(本物のAと)同じに見えた!」(Nara Dreamland Frequently Asked Questions abandonedkansai.com)と感嘆する。

IV むすびにかえて

筆者の単なる想像だが、旅芸人一座の親分出身の松尾としては、いわば「勧請」のための仁義を切るべく子分共を引き連れて渡米し、シンボルとなる入口の「鳥居」などを金を掛けてそれらしく造営すれば、こどもたちに米国の「本物」に行った気分させる「模倣遊園」としてはことたれりと考えたのかも知れない。現に彼は奈良の春日大社を横浜の姉妹遊園内に勧請している。

松尾の考え方からすればニセモノのテーマパーク(模倣遊園)も決して本物のテーマパークと相対立する、相並ぶ立たぬ不倶戴天の敵というわけではない。むしろ遠い異国にある本物のテーマパークに対する日々の敬慕・憧憬の念を増幅させる「旅の疑似体験」であった。なぜなら昭和30年代当時は米国にだけ存在した憧れの一流テーマパークは日本よりあまりにも遠かったからである。当時の渡航規制や外為の制限の故に、観光企業のトップであった松尾国三や川崎千春などのごく少数の数寄者を除けば庶民は遠く彼の地にまで参詣する訳には行かず、ニセモノと知りつつ家族を模倣遊園に連れ出した。連れて来られた子供たちは、おそらく「これこそ本物」と信じ込まされていたことであろうか。ひょっとしたら、松尾に口説かれてドリームランドの発起人たることを承諾したディズニー好きの財界人も、松尾らから本社・本山にしかるべき仁義を切った「本物」の「勧請」と信じ込まされていた可能性すらあろうか。

N開園を報じた当時の記事を見ても知的財産権という観点からの懸念を示すものは極めて少ない。そんな当時のわが国の風潮の中で子供向けの『学習画報』の以下の見学記事は注目される。同

誌は「おやにてるぞ ディズニーランドとくらべて」という項目を特設して、両者の写真を比較した上で「ドリームランドは、ディズニーランドのような遊園地を、というわけで作った遊園地だから、少しぐらいにいても、しょうがないけどね」「もっと、もっと、日本らしい遊園地を考えたほうがずっとおもしろかったと思うわ」³⁹⁾と、独創性の欠落に気付いた豆記者という設定で、観光デザイナーたる松尾らに対して「これをつくった人たち、気がつかなかったのかしら」⁴⁰⁾など子供向けの雑誌としては結構辛口のコメントを語らせている。

筆者はウォルトが面会した松尾一行を幾分でも評価した点があると仮定すると、同業に当る遊園地の専門技術者たる阪上の同行ではなく、「新歌舞伎座の設計に当たった村野藤吾先生」(人生, p320)という超大物建築家の同行がなんらかの成果に結び付いた可能性を指摘しておきたい。村野藤吾ともあろう大家が単に「パチパチ写真を撮って」⁴¹⁾まがいものを安易に設計したとは考えたくない。なぜなら村野藤吾は大口の施主にも「そんな馬鹿な設計は出来ない、お断りする」⁴²⁾、大手建築業者の懇願も「断じて聞かん」⁴³⁾と断固拒絶する「妥協ということは、大嫌いな」⁴⁴⁾こわもて勇猛果敢の大建築家として知られているから、やはり何らかの「協力を得られた!」(夢の跡, p60)可能性を示唆しているようにも筆者には感じられる。しかし日米の関係者の大半は既に死亡し、松尾は一切のメモ類を残さなかったと伝えられるから、ウォルトが松尾にどういう英会話をしたのかは残念ながら真相不明である。両者会談に際して「仲介の労をとった」親友(挨拶)の永田雅一の「顔」を立てて、ウォルトが遠来の松尾や村野らに並の「絵葉書」「パンフレット」以上の“手土産”を持たせた

39)40)「アフリカ探検もできるぞ!—奈良ドリームランドをたずねて—」『学習画報』世界文化社、昭和36年10月、p78~79

41) 加賀見俊夫『海を超える想像力—東京ディズニーリゾート誕生の物語』講談社、平成15年、p46

42)43)44)45) 松尾と今東光の対談、昭和34年3月『財界』、p68~69

上、誤解を招くかもしれない「リップサービス」を
思わず漏らしたと仮定しても、それを同行の通訳
が松尾にどう的確に翻訳したのか、「耳が大分遠
い」⁴⁵⁾松尾がどの程度聞き取ったのか大変興味あ
るところであるが、一切は謎に包まれたままである。
はたして真っ赤な「ニセモノ」か、松尾が当時の日
本の青少年に与えたいと願った米国有名遊園
地への「旅の疑似体験」にはなんらかの「真正性」
のかけら⁴⁶⁾が残るのか、こうした観光社会学の問
題意識を持って外周鉄道の遺跡を観察すれば、
何がしかの観光価値を認めることも可能であろう。

46) 筆者は高校生の時、開園間もないNを遠足で訪問した
実体験を持つが、松尾が同時期に推進していた「芦山荘」の
温泉会館拡張反対の市民運動(拙著『観光デザインとコミュ
ニティデザイン—地域融合型観光ビジネスモデルの創造者
“観光デザイナー”—』平成26年4月、日本経済評論社,p206
以下)の渦中であつたこともあり、正直なところ少年期より松
尾には好印象を抱いて来なかった。したがって本稿のN等の
評価にも筆者の年来の独断と偏見が混入していることを自覚
している。本稿執筆に当り、N等の真実を明らかにすべく、当
時の一次資料・内部資料を公開中の私的サイト(注記済み、
平成27年3月末検索)を参照し、引用させていただいたことに
感謝する。

The Study of Fictitiousness in Theme Parks

True-False Discussion of Nara Dream Land from a Tourism-Sociological

Viewpoint

Isao Ogawa

This paper aims to explore fictitiousness in tourism and chooses the Nara Dream Land theme park, which the author describes as a “copy” of the “original” U.S. Disneyland Resort, as the object of study. The author discusses such matters as the relationship between the original and the copy, whether there were any connections between the creator of the original and the founders of the copy, and the chasm of understanding that existed between the two parties.

Nara Dream Land was founded by Kunizo Matsuo. Deeply inspired by what he saw at Disneyland in the United States, Matsuo set out to build its copy in Japan with the sheer desire to share the same exciting experience with Japanese children. The park, however, has often been held in a negative light, with the dominant view being it was an unofficial imitation, one that hindered the efforts years later to open the official Disneyland in Tokyo. The park was also criticized for having ruined the valuable historical sites featured in ancient manyo waka poems.

Matsuo’s autobiography and statements of people close to him indicate that he met Walt Disney in 1958 and secured Disney’s commitment to provide some kind of assistance in building Nara Dream Land. Their accounts can be confirmed in several newspaper articles of the time, but the facts are elusive. Around the same time, the Yomiuri Shimbun Corporation

was also vying to win Disney’s cooperation for a plan to build a large amusement park by leveraging business contacts with the Nippon Television Network.

Of the 20 founders of original Dreamland Corporation, the company that erected Nara Dream Land, the author takes a particular interest in Masaichi Nagata, president of the Daiei Motion Picture Company. Nagata acquired Disney’s film distribution rights during his 1949 visit to the United States and subsequently his company launched a foreign film division. He also engaged in Disney character licensing and later helped promote Tokyo Disneyland in accordance with the agreement with the Walt Disney Company headquarters. While recruiting potential investors for Dreamland Corporation, Nagata claimed that he introduced Matsuo to his close friend ‘Walt’ at the time of Matsuo’s trip to America and that Matsuo acquired Disney’s permission to open a reproduction in Japan. Given that Nagata was one of the few businessmen in Japan with a strong connection to Walt Disney, and one who made regular visits to the U.S. Disneyland, it can be presumed that his name appearing on the list of founders as well as his active support for the proposed park was enough to convince people that Nara Dream Land was not a copy but an official reproduction of the U.S. original. In other words, Nagata’s role was akin to that of an “apparent representative.”

The majestic railway station building situated at the Nara Dream Land entrance is said to have been designed by a famous architect when he accompanied Matsuo on his U.S. trip. The railroad encircling the park is a standard feature in all Disneyland parks around the world, except for Tokyo Disneyland, and the park in Nara also adhered to this style marked by the founder's love of trains. The author speculates that Matsuo, a former boss of a traveling theater troupe, flew to the U.S. with henchmen in a show of Japanese "Jingi", and perhaps assumed that giving his park an entrance gateway identical to the original was sufficient to make it a Disneyland reproduction.

Nara Dream Land is a negative legacy and a symbol that Japan, in the years Nara Dream Land was being developed, had not yet reached the level of social maturity that ensured the protection of intellectual property rights. The park nevertheless had a significant impact on numerous aspects of Tokyo Disneyland, from its planning and establishment to designs, and for this reason, the author argues that the now desolate park, and in particular, the station building of the park-encircling railroad, not having undergone any kind of renovations since first built, merits recognition as industrial heritage representative of the Japanese theme park industry.

